

2025年3月24日

いわぎんリサーチ&コンサルティング株式会社

特別調査「本県の地域資源への着目によるインバウンド誘客の可能性」について ～「みちのく潮風トレイル」の事例を基に誘客の可能性と課題を考察～

いわぎんリサーチ&コンサルティング株式会社（代表取締役 佐々木泰司）は、特別調査として「本県の地域資源への着目によるインバウンド誘客の可能性」をまとめました。

本調査では、インバウンドの現状について統計などを用いて分析を行うとともに、近年海外のメジャーなメディアに多数掲載され国内外で注目が集まっている「みちのく潮風トレイル」を事例として取り上げ、本県におけるアドベンチャーツーリズム*によるインバウンド誘客の可能性や課題について考察しました。

概要については以下のとおりです。

《概要》

- インバウンドの現状を見ると、全国、本県ともにコロナ禍で一度落ち込んだものの、2023年以降は回復の動きとなり、全国は24年は過去最高を更新したほか、本県も過去最高を更新する見通しとなっている。一方、日本における訪問地は三大都市圏に集中する傾向が強まり、地方への誘客が課題の一つとなっている。
- 政府ではインバウンドの回復に向けた施策の一つとしてアドベンチャーツーリズム（以下、AT）の推進を図っている。日本の各地域においても、自然豊かな土地が多いほか、それぞれが独自の食や歴史、文化といった資源を多数有しており、ATによる誘客が期待できると考えられる。
- 世界最大のATイベントにおいて催行されたみちのく潮風トレイルのツアーは、ハイキング、カヤック、サイクリングなどのアクティビティのほか、塩づくりや震災学習などを織り混ぜた様々な体験ができる内容となっており、参加者から好評を博した。
- 本県においては、四季折々を楽しめる豊富な自然があり様々なアクティビティが楽しめる素地がある。また、平泉や縄文文化などの世界文化遺産、震災学習、歴史ある建造物や街並み、地域の食（特産品や郷土食など）、伝統芸能、伝統工芸など多様な文化があり、ストーリー次第で数多くの組み合わせができるものと考えられる。
- ATを推進していく上での課題として、ガイドの不足が挙げられ、育成の仕組み作りが必要と考えられる。また、県内で様々なアクティビティや体験の利用者が増加した場合、これまで以上に自然環境の保全や地域の人々の暮らしを守るための工夫が必要となることが想定される。

*アドベンチャーツーリズム：アクティビティ体験、自然体験、文化体験の3つの要素のうち2つ以上の要素で構成される旅行のことで近年欧米を中心に人気が高まっている。

本調査の内容は別紙のとおりです。

なお、本調査については3月31日に弊社ホームページへ掲載いたします。

（弊社HP ⇒ レポート ⇒ Research Report 2025年4月）

《問い合わせ先》

いわぎんリサーチ&コンサルティング株式会社
経営支援部 地域経済調査担当 阿部 瑛子
TEL：019-624-8344

2025年3月24日

本県の地域資源への着目による
インバウンド誘客の可能性

いわぎんリサーチ&コンサルティング株式会社
代表取締役 佐々木 泰司
盛岡市中央通一丁目2番3号
(担当 経営支援部 地域経済調査担当 阿部 瑛子)
TEL 019-624-8344

本県の地域資源への着目による インバウンド誘客の可能性



「アドベンチャートラベル・ワールドサミット」でみちのく潮風トレイルのツアーを楽しむ参加者
提供：(株)みちのリトラベル東北

《要 約》

- インバウンドの現状を見ると、全国、本県ともにコロナ禍で一度落ち込んだものの、2023年以降は回復の動きとなり、全国は24年は過去最高を更新したほか、本県も過去最高を更新する見通しとなっている。一方、日本における訪問地は三大都市圏に集中する傾向が強まり、地方への誘客が課題の一つとなっている。
- アドベンチャーツーリズム（もしくはアドベンチャートラベル、以下AT）とは、アクティビティ体験、自然体験、文化体験の3つの要素のうち2つ以上の要素で構成される旅行のことを指し、近年欧米を中心に人気が高まっている。政府ではインバウンドの回復に向けた施策の一つとしてATの推進を図っている。日本の各地域においても、自然豊かな土地が多いほか、それぞれが独自の食や歴史、文化といった資源を多数有しており、ATによる誘客が期待できると考えられる。
- 国内では北海道がATの先進地となっており、23年9月には世界最大のATイベントである「アドベンチャートラベル・ワールドサミット」（以下、ATWS2023）が開催された。本イベントでは講演会や商談会などのほか、会期前・中・後のそれぞれでツアー体験も実施され、日本はアドベンチャートラベル目的地として非常に高い評価を受けた。
- みちのく潮風トレイルは、近年、海外のメジャーなメディアに多数取り上げられるなど国内外で注目が高まっている。ATWS2023において催行されたツアーはハイキング、カヤック、サイクリングなどのアクティビティのほか、塩づくりや震災学習などを織り混ぜた様々な体験ができる内容となっており、参加者から好評を博した。
- 本県においては、四季折々を楽しめる豊富な自然があり様々なアクティビティが楽しめる素地がある。また、平泉や縄文文化などの世界文化遺産、震災学習、歴史ある建造物や街並み、地域の食（特産品や郷土食など）、伝統芸能、伝統工芸など多様な文化があり、ストーリー次第で数多くの組み合わせができるものと考えられる。
- ATを推進していく上での課題として、ガイドの不足が挙げられ、育成の仕組み作りが必要と考えられる。また、県内で様々なアクティビティや体験の利用者が増加した場合、これまで以上に自然環境の保全や地域の人々の暮らしを守るための工夫が必要となることが想定される。

はじめに

全国のインバウンドの状況を見ると、コロナ禍によって一度落ち込んだものの 2023 年は回復基調となり、さらに 24 年は円安などが追い風となったことなどから過去最高を更新した。また、本県においても、そうした背景のほか盛岡市が 23 年 1 月にニューヨークタイムズの「2023 年に行くべき 52 カ所」に選ばれたことにより注目が集まったことなども寄与して、23 年は回復傾向となったほか 24 年も過去最高を更新する見通しとなっている。

インバウンドは今後も増加が見込まれる一方、現在は訪問地が三大都市圏に集中する傾向がありオーバーツーリズムの状況が見られるほか、地方は三大都市圏との比較では伸び率に開きがあり、地方への誘客が課題の一つとなっている。

そうしたなか、近年は欧米を中心にアクティビティ体験、自然体験、文化体験の 3 つの要素のうち 2 つ以上で構成される旅行形態である「アドベンチャーツーリズム（もしくはアドベンチャートラベル）」に注目が集まっており、観光庁においてもインバウンド回復戦略の一つとして推進を図っている。本県においては、長距離自然歩道である「みちのく潮風トレイル」が世界的なアドベンチャートラベルのイベントで紹介されたほか、Forbes 誌の「2025 年に行くべき 15 か所」や The Times 紙「日本で訪れるべき場所 14 選」に選ばれるなど海外メディアにも取り上げられており、誘客への期待が高まっている。

そこで本稿では、インバウンドの現状について統計などを用いて分析を行うとともに、みちのく潮風トレイルの事例を基に本県におけるアドベンチャーツーリズムによるインバウンド誘客の可能性や課題について考察する。

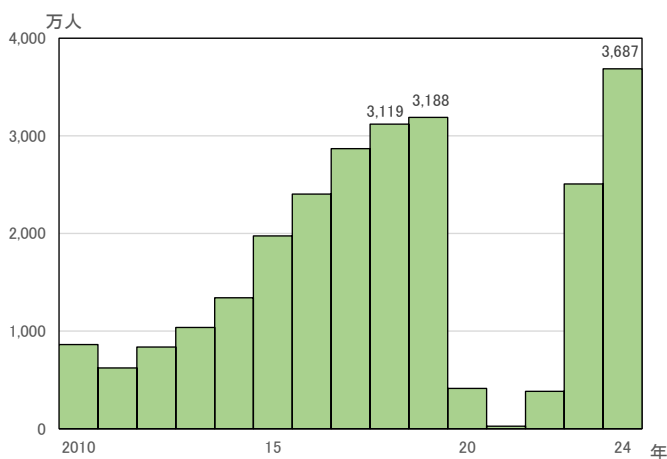
1. インバウンドの現状

まず、インバウンドの現状について、新型コロナウイルス感染拡大前の 2019 年との比較も交えながら確認していく。

(1) 訪日外客数と外国人延べ宿泊者数の推移

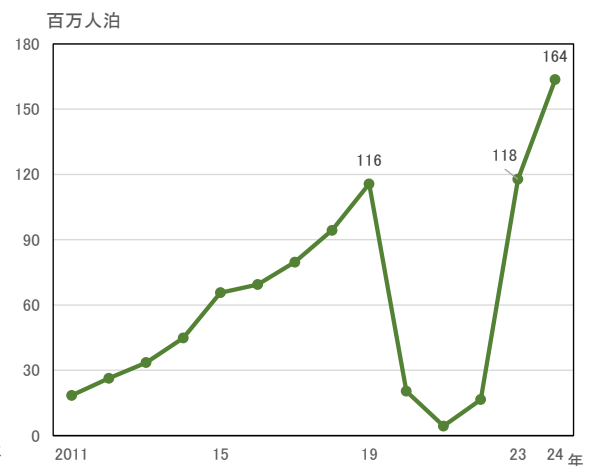
全国の訪日外客数を見ると、18 年に初めて 3 千万人を突破し、同ウイルスの感染拡大の影響から 20～22 年は落ち込んだものの、同ウイルスの水際対策が 22 年 10 月に緩和されたことなどから 23 年は大幅に回復するとともに、24 年には過去最高を更新した(図表 1)。

図表 1 訪日外客数の推移 (全国)



(注) 2024 年は推計値
資料：日本政府観光局 (J N T O)

図表 2 外国人延べ宿泊者数の推移 (全国)



(注) 2024 年は速報値
資料：観光庁

また、外国人延べ宿泊者数も同様に、コロナ禍で20～22年は落ち込んだものの24年は164百万人泊となり過去最高を更新した（前ページ図表2）。

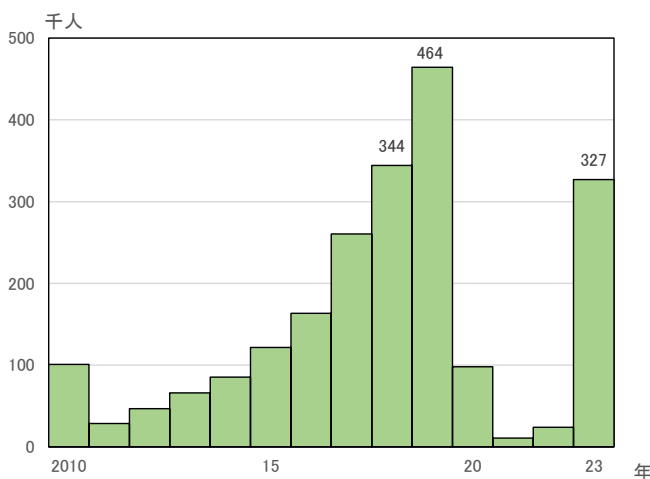
本県においても全国と同じく、23年の外国人観光客が327千人と回復の動きとなったほか、24年の延べ宿泊者数は383千人泊と19年を上回った（図表3、4）。なお、24年の外国人観光客数（速報値）も19年を上回る見込みとなっている。

（2）インバウンドの国別の内訳

全国の訪日外客数の内訳をコロナ禍前の19年との比較で見ると、その構造には変化が生じている。19年は中国が30.1%で最も多かったが、24年は中国の割合が低下して韓国が23.9%で最も高い割合となったほか、台湾や米国などが伸長した（図表5）。ただし、25年1月の速報値では春節などの要因から中国が最も多くなっており、今後の回復が期待される。

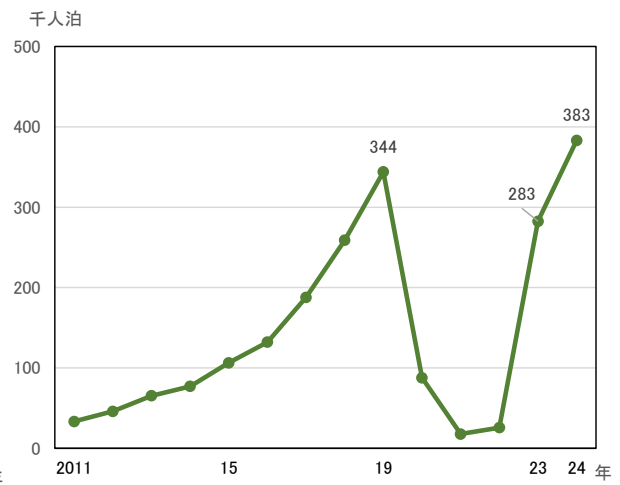
また、本県の外国人観光客の内訳を19年との比較で見ると、23年は中国は10ポイント以上割合が低下した一方、台湾が6割超に上昇したほか、香港や米国なども割合が伸びた（次ページ図表6）。

図表3 外国人観光客の推移（岩手県）



資料：岩手県商工労働観光部

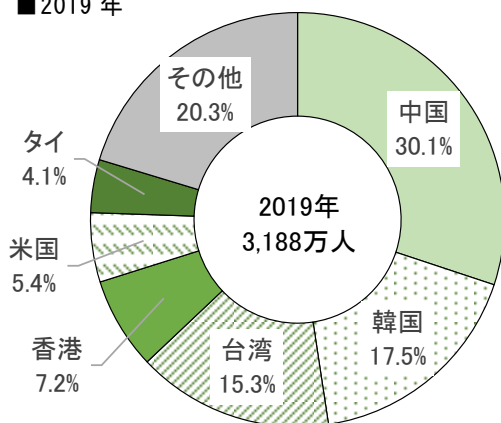
図表4 外国人延べ宿泊者数の推移（岩手県）



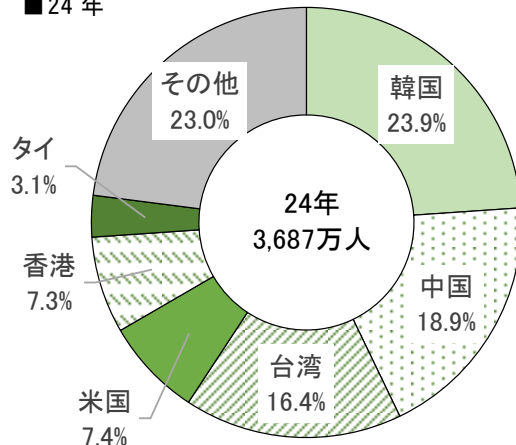
（注）2024年は速報値
資料：観光庁

図表5 訪日外客数の内訳（全国）

■ 2019年

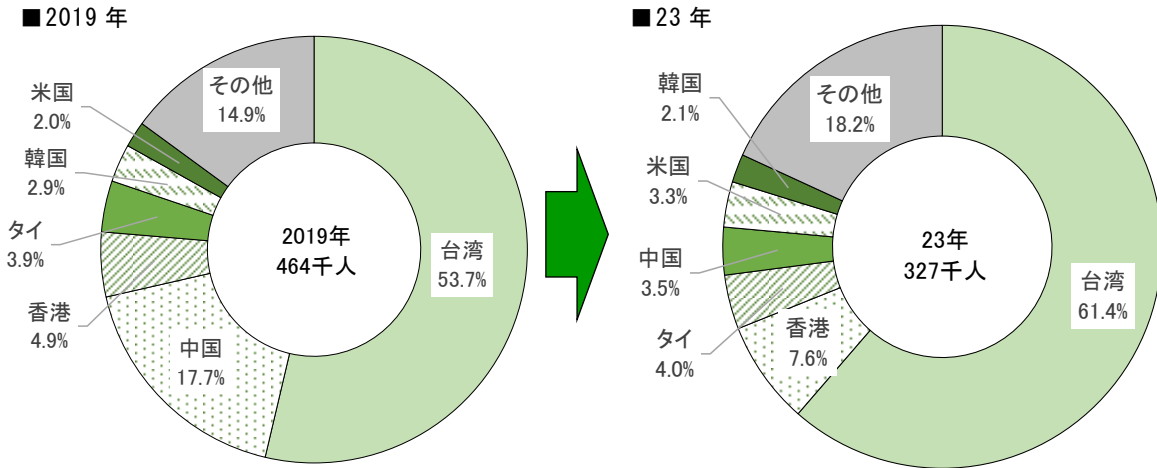


■ 24年



（注）2024年は推計値
資料：J N T O

図表 6 外国人観光客の内訳（岩手県）



（注）四捨五入の関係で合計が 100%にならない場合がある
資料：岩手県商工労働観光部

（3）インバウンドの訪問地

訪問地は 19 年は三大都市圏が 4 割弱となっていたが、23 年には 48.4%と半数近い割合まで増加し、三大都市圏に人気が集まる傾向が強まった（図表 7）。

また、外国人延べ宿泊者数を都道府県別に見ると、24 年は東京都が 19 年比で 10 ポイント近く増加して 35.0%となり、本県は順位が 33 位から 30 位へやや上昇したものの、全国に占める割合は 24 年は 19 年比で 0.1 ポイント低下の 0.2%となった（図表 8）。

なお、24 年は三大都市圏の割合が上昇し 7 割弱を占めている。

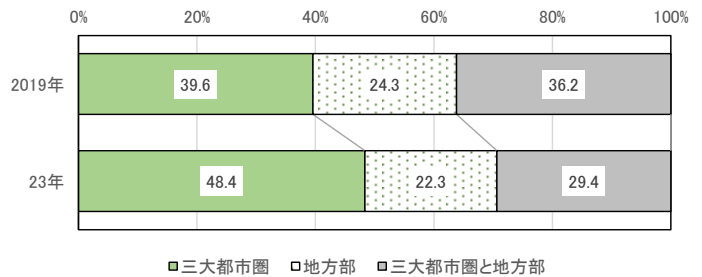
訪問地や都道府県別の延べ宿泊者数を見ると、三大都市圏を中心に人気が集まっており、近年はその傾向が強まっている。

（4）平均泊数と旅行消費額

訪日外国人の平均泊数

を見ると、23 年は 19 年比でいずれの国籍・地域も増加しており、1 回あたりの旅行での滞在期間が長くなってきていることが分かる（次ページ図表 9）。また、全国の旅行消費額についても、訪日外客数や一人当たりの消費額が増加傾向にあることから 24 年の推計は 8 兆 1,395 億円と過去最高を大幅に更新した（次ページ図表 10）。

図表 7 訪日外客の訪問地



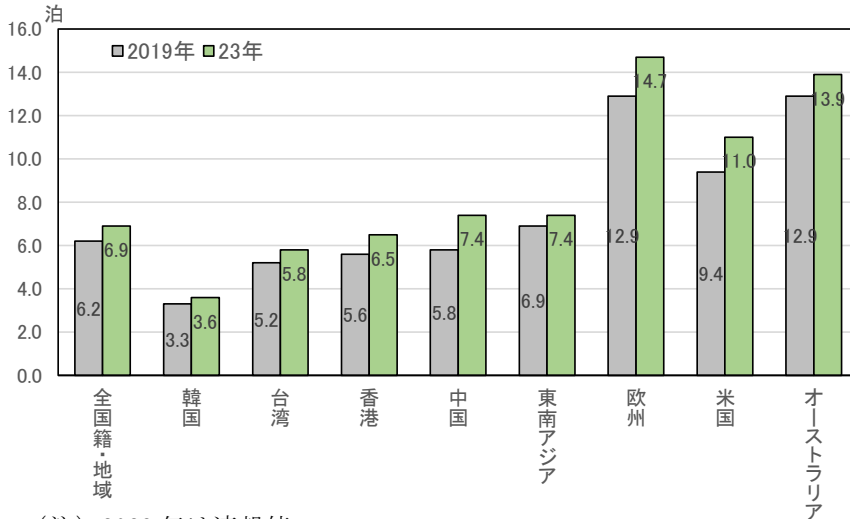
（注）1. 2019 年 4～12 月期と 23 年 4～12 月期での比較
2. 四捨五入の関係で合計が 100%にならない
資料：観光庁

図表 8 都道府県別の外国人延べ宿泊者数

2019 年				24 年			
順位	都道府県	延べ宿泊者数	割合 (人泊、%)	順位	都道府県	延べ宿泊者数	割合 (人泊、%)
1	東京都	29,350,650	25.4%	1	東京都	57,200,120	35.0%
2	大阪府	17,926,170	15.5%	2	大阪府	25,336,000	15.5%
3	京都府	12,025,050	10.4%	3	京都府	16,613,290	10.2%
4	北海道	8,805,160	7.6%	4	北海道	9,651,540	5.9%
5	沖縄県	7,750,760	6.7%	5	沖縄県	7,327,960	4.5%
6	千葉県	4,798,250	4.1%	6	福岡県	6,916,340	4.2%
7	福岡県	4,261,960	3.7%	7	神奈川県	4,433,800	2.7%
8	愛知県	3,633,500	3.1%	8	千葉県	4,400,220	2.7%
9	神奈川県	3,248,700	2.8%	9	愛知県	3,850,060	2.4%
10	静岡県	2,493,790	2.2%	10	山梨県	2,382,060	1.5%
...				...			
33	岩手県	343,970	0.3%	30	岩手県	383,040	0.2%
	全国計	115,656,350	100.0%		全国計	163,598,990	100.0%
	三大都市圏	72,568,690	62.7%		三大都市圏	113,602,460	69.4%
	地方部	43,087,660	37.3%		地方部	49,996,530	30.6%

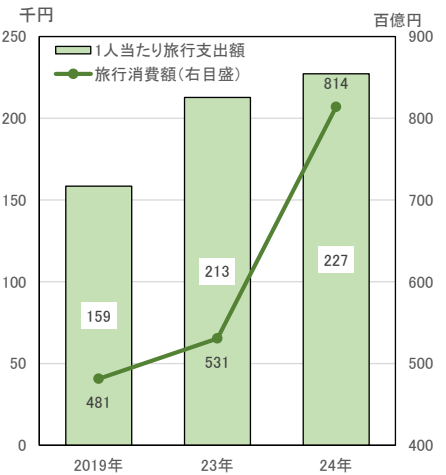
（注）2024 年は速報値
資料：観光庁

図表 9 訪日外客の平均泊数



(注) 2023 年は速報値
資料：観光庁

図表 10 訪日外国人の旅行消費額



(注) 2024 年は速報値
資料：観光庁

2. アドベンチャーツーリズムの推進

(1) アドベンチャーツーリズムとは

これまで見てきたとおりコロナ収束後にインバウンドは急速に回復したほか、さらに増勢が続いており、2025年1月の訪日外客数は単月で過去最高を更新した。また、(株)JTBの推計によると25年の訪日外国人旅行者数は4,020万人と初めて4千万人を超えるとされているなど今後も増勢が続くとみられる。一方、現在は訪問地が三大都市圏に集中しており、地方への誘客が課題の一つとなっている。そうしたなか、近年注目が集まっている旅行のかたちが「アドベンチャーツーリズム」(もしくは「アドベンチャートラベル」、以下、AT)である。

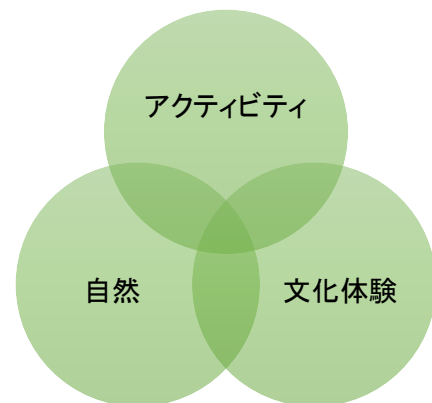
ATとは、アクティビティ体験、自然体験、文化体験の3つの要素のうち2つ以上の要素で構成される旅行のことを指し、近年欧米を中心に人気が高まっている。

観光庁によると、AT旅行者は旅行を通じて自分自身の変化や視野の拡大、学び等を得ることを目的としており、個々のコンテンツの質の高さは当然として、旅行者それぞれの興味や関心に応じたテーマの設定やストーリー性のある滞在プランなど、その地域ならではの様々な体験を求めていることが特徴である。

また、ATの普及促進や推進体制の整備などを行っている(一社)日本アドベンチャーツーリズム協議会のHPによると、AT旅行者は教育水準の高い富裕層の割合が高く、長期滞在を好み、アウトドア用具などにこだわる層が多いことから経済波及効果が高く、北南米・欧州・豪州の主要地域ではそれぞれの国内市場を除く海外での消費額のみで推計6,830億ドルの経済効果があるとされている。

23年3月に閣議決定された「観光立国推進基本計画」では、「持続可能な観光」、「消費額拡

図表 11 ATのイメージ図



資料：観光庁資料を基に当社作成

大」および「地方誘客促進」をキーワードに、これまで以上に質の向上を重視した観光へと転換していくことが必要としており、インバウンド回復戦略においてはA Tを推進項目の一つとして挙げている。

日本の各地域においても、自然豊かな土地が多いほか、それぞれが独自の食や歴史、文化といった資源を多数有しており、A Tによる誘客が期待できると考えられる。

(2) A Tの事例

国内におけるA Tの事例を見ると、先進地は北海道となっている。広大な土地と豊かな自然を有する北海道は多様なアクティビティを楽しむことができる環境が整っており、北海道庁でもA Tを観光施策の柱の一つとして位置付けている。

23年9月には世界最大のA Tイベントである

「アドベンチャートラベル・ワールドサミット」

(以下、ATWS2023)が開催され、世界64の国と地域から旅行会社やメディア関係者、ツアーオペレーター、アウトドアメーカー、DMOなど773

名が参加した。本イベントでは講演会やセミナー、商談会などのほか、会期前・中・後のそれぞれでツアー体験も実施され、そのうち会期前のツアー(プレサミット・アドベンチャー)は道内15コース、道外7コースで開催された(図表12)。それぞれ登山やトレッキング、サイクリング、カヌーなどをメインアクティビティとして、各地の自然や文化を体験できるツアーとなっている。なお、東北地方においては本県を含む4県にまたがる長距離自然歩道※である「みちのく潮風トレイル」のツアーが催行されており、詳細については「3. 本県事例」にて紹介する。

本イベントの参加者アンケートの結果を見ると、全体満足度は平均で4.5点、アドベンチャートラベル目的地としての日本の評価は4.7点(いずれも5点満点)と非常に高い評価を受けており、日本におけるA Tの期待や関心の高さが窺われる。

※長距離自然歩道：四季を通じて手軽に、楽しく、安全に自らの足で歩くことを通じて、豊かな自然や歴史・文化とふれあい、心身ともにリフレッシュし、自然保護に対する理解を深めることを目的とした歩道。環境省が計画し、国および各都道府県で整備を進めている。

図表12 ATWS2023のプレサミット・アドベンチャーの一覧

No.	開催地域	ツアー名	メインアクティビティ
1	北海道	大雪山周遊～5泊6日ハイキングツアー～	登山
2		洞爺湖有珠山ジオパーク&黒松内ローランド・アドベンチャー	トレッキング
3		日高「アイヌ」アドベンチャー	トレッキング
4		マチネシリトレッキング・ワイルドサイクリング	トレッキング&サイクリング
5		洞爺湖から日本海へ 4泊5日サイクリングツアー	サイクリング
6		「地の果て・シリエトク(知床)」を目指すサイクリングツアー	サイクリング
7		日本文化伝承の北前船、道南の要所を巡るサイクリングツアー	サイクリング
8		日本最北の地を目指して 上川・宗谷 カヌーとサイクリング	カヌー、サイクリング
9		火山が造った箱庭・大沼カヌーツーリング ～カヌー&農山漁村交流4日間～	カヌー
10		日本最北の離島 4泊5日ハイキングツアー	シーカヤック
11		大雪山国立公園唯一の自然湖「然別湖カヤック&トレッキング」	カヤック、トレッキング
12		源流から海へ ラフティングとカヌーで巡る水の循環エコツアー	ラフティング
13		ザ ワイルドフライフィッシング イン イースト北海道	フィッシング
14		道東の三国立公園を巡る6泊7日ワイルドライフツアー	野生動物観察
15		女性による女性のためのSDG文化体験 ～下川・西興部・滝上～	文化体験
16	東北	みちのく潮風トレイルハイクでめぐる三陸海岸	ハイキング、シーカヤック、サイクリング
17	長野	長野の古道を歩いて過去への旅へ	トレッキング
18	静岡	静岡アドベンチャー～富士山のある雄大な里～	ハイキング、サイクリング、シーカヤック、フィッシング
19	四国	訪れるべき四国を代表とする海と山と川をEバイクで巡る旅(5泊6日)	サイクリング、SUP
20	九州 屋久島	世界遺産のミステリーアイランド・屋久島でトレッキング&ウォーターアクティビティを目指す	登山、リバーカヤック
21	九州 阿蘇	神話の火山での生活と九州のサイクリングを楽しむ旅	サイクリング
22	沖縄	亜熱帯の島、沖縄を体感するサイクリング&ウォーキング	サイクリング、ウォーキング、異文化体験

資料：アドベンチャートラベル・ワールドサミット北海道実行委員会資料を基に当社作成

3. 本県事例～みちのく潮風トレイル～

本県におけるATの事例として、前述のATWS2023においてツアーが催行された「みちのく潮風トレイル」を紹介する。

(1) みちのく潮風トレイルとは

① 成り立ち

東北太平洋岸自然歩道（通称：みちのく潮風トレイル＝Michinoku Coastal Trail、以下MCT）は東日本

大震災からの復興事業の一つとして環境省が設定した長距離自然歩道である。青森県八戸市から福島県相馬市までの4県29市町村（岩手県は洋野町、久慈市、野田村、普代村、田野畑村、岩泉町、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、計12市町村）をつなぐ全長1,000キロを超える道として、2019年6月に全線開通した。MCTは長距離自然歩道の目的に加えて、震災の記憶を語り継ぐことや被災地における交流人口の増加、地域の活性化などのほか、東北太平洋岸を車ではなく歩くスピードで旅することで自然や歴史、文化などの奥深さを知り、体験する機会を提供するという構想の下で設定されており、運営関係者や利用者の共通の理念として「みちのく潮風トレイル憲章」が定められている。

② MCTの魅力

MCTは近年Forbes誌「2025年に行くべき15か所」やThe Times紙「日本で訪れるべき場所14選」のほか、ニューヨークタイムズ紙、ウォール・ストリート・ジャーナルなど海外のメジャーなメディアに多数取り上げられており、国内外で注目が高まっている。また、25年1月にニューヨークで開催された旅行博においてプロモーションが行われ、現地PRを行った株式会社みちのりトラベル東北（盛岡市）によると「MCTの名前を聞いたことがある、もしくはすでに知っているという方が増え、知名度が上がっていることを肌で感じられた」という。

MCTの管理・運営、情報発信などを行っている認定NPO法人みちのくトレイルクラブ（宮城県名取市）の事務局長・常務理事 相澤久美氏によると、インバウンドの利用状況についてはコロナ明けから欧米やオーストラリアを中心に右肩上がりが増えており、今

～みちのく潮風トレイル憲章～

- 1.美しい風景と風土を楽しむ道とします。
- 2.地域に暮らす人々とこの地を訪れる人々との間にこころの交流が生まれる道とします。
- 3.自然の優しさと厳しさを胸に刻む道とします。
- 4.震災をいつまでも語り継ぐための記憶の道とします。
- 5.豊かな自然・文化を次世代へ受け継ぐ道とします。
- 6.歩くことを愛するすべての人々を歓迎し、皆で育てる道とします。

資料：環境省資料を基に当社作成



ニューヨークでの旅行博の様子
提供：(株)みちのりトラベル東北



浄土ヶ浜（宮古市）の歩道から見られる美しい景色

後も増加が見込まれるとのことである。また、日本のトレイルに共通した魅力として、地域の住民とのふれあいや多様な自然、文化（人々が暮らしている姿、土地の歴史など本当の意味での日本の暮らし）に出会うことができることなどが挙げられるとした上で、さらにMCTは以下の点が特色・魅力ではないかと話している。

- ・（世界でも珍しい）海を見ながら歩ける 1,000 キロ
- ・海岸段丘、リアス式海岸、仙台平野といった地形の変化とそれによる街並みや文化の違い
- ・東日本大震災からの復興、記憶の伝承、防災・減災など未来への学び
- ・4県 29 市町村が「みちのく潮風トレイル憲章」の理念を共有しながら広域連携でつなぐ道（ハイカーを歓迎しサポートする姿勢、一緒にトレイルをPRなど）

（2）ATWS2023 におけるツアー

前述のとおり、ATWS2023 では参加者を対象にMCTでのハイキングなどをメインとしたツアー「みちのく潮風トレイルハイクでめぐる三陸海岸」が実施された。旅程は図表 13 のとおりである。福島県相馬市からスタートし、

図表 13 「みちのく潮風トレイルハイクでめぐる三陸海岸」旅程

日付	主な場所	主な内容
1日目	福島県相馬市	オリエンテーション、ハイキング
2日目	宮城県気仙沼市	ハイキング、日本酒ペアリングディナー
3日目	陸前高田市	サイクリング、震災学習、座禅体験
4日目	宮古市、田野畑村	シーカヤック、ハイキング
5日目	田野畑村	ハイキング、塩づくり体験、神楽鑑賞
6日目	洋野町、青森県八戸市	ハイキング、SUP、グランピング
7日目	青森県八戸市	ヨガ、ハイキング

資料：㈱みちのりトラベル東北、JNTO資料を基に当社作成

宮城県、岩手県、青森県のMCTの主要部分を歩きながら、カヤック、サイクリング、ヨガ、グランピングなどのアクティビティのほか、塩づくり、震災学習などを織り混ぜた様々な体験ができる内容となっている。

ツアーを企画・催行した㈱みちのりトラベル東北によると「参加者は東日本大震災から復興を遂げた三陸の自然と地域の人々の温かさに特に感動していた。トレイルに加えて、そこを取り巻く環境とつながるストーリーが素晴らしいとの声が多数聞かれた。ATWS2023の開会式では、20 コース以上あったプレサミット・アドベンチャーのなかでもMCTのコースが大きく取り上げられ、その後の商談などにもつながった」とのことである。



ATWS2023 のツアー「みちのく潮風トレイルハイクでめぐる三陸海岸」の様子
提供：㈱みちのりトラベル東北

4. 本県におけるA Tの可能性と課題

最後に、事例などを踏まえて本県における今後のA Tによる誘客の可能性と課題について考察する。

(1) 誘客の可能性

本県においては、2カ所の国立公園をはじめとして四季折々を楽しめる豊富な自然があり、登山、ハイキング、スキー、カヤックなど様々なアクティビティが楽しめる素地がある。盛岡駅や花巻空港などの拠点からそう遠くない場所でそのような体験ができることも強みの一つであろう。また、平泉や縄文文化などの世界文化遺産、震災学習、歴史ある建造物や街並み、地域の食(特産品や郷土食など)、伝統芸能、伝統工芸など多様な文化があり、ストーリー次第で数多くの組み合わせができるものと考えられる。本稿で取り上げたMCTのツアーは様々なアクティビティや体験を組み合わせ、ストーリー性ととともに参加者から高い評価を得ていた。従来のコンテンツをさらに磨き上げ、魅力を発信していくことが重要と考える。

本県のインバウンドについては、現在は台湾が半数以上を占めているが、ニューヨークタイムズに盛岡市が取り上げられたことやMCTの知名度の向上などにより今後は欧米やオーストラリアなどからの誘客も伸びが期待されるほか、三大都市圏などのオーバーツーリズムを避ける動きや日本へのリピーターが新たな訪問地を求めてくるといった流れも見込まれる。

㈱みちのりトラベル東北の代表取締役社長 相馬高広氏は「A Tは今後さらに需要の増加が見込まれるものであり、そのなかで岩手県にはたくさんの要素がある。MCTはもちろん、豊富な自然を活用したアクティビティやマリンスポーツなど可能性の幅がまだまだある。また、体験価値として人との交流や製作体験など、景観や自然以外の分野のコンテンツにおいても伸びていく可能性が大いにあると感じている。現在提案しているアドベンチャー商品やコンテンツに加えて、富裕層をターゲットにアレンジした特別なプランニングや観光に重きを置きつつ、アドベンチャー要素も取り込んだプランの提案をこれからも積極的にしていきたい。特に伸びている欧米のほか、ハイキング文化が盛んな台湾の方々の需要をさらに掘り起こしていきたい」としている。

なお、本年秋頃には日本政府観光局が世界最大のアドベンチャートラベル業界団体「Adventure Travel Trade Association (ATTA)」と連携して、東北エリアにて「Adventure Week[※]」を開催する予定となっており、本県を含めた東北地域を中心にA Tの注目がさらに高まることが期待される。

※Adventure Week : ATTA が定める基準を満たした特定の地域において、ATTA が厳選した旅行会社、メディア関係者が実際に開催地のA T商品を体験し、地域との商談会を通じて商品のさらなる磨き上げを目的としたプログラム。

(2) 課題

① ガイドの育成

A Tは付加価値の高い旅行であり、その場所での体験や学びによる気付きや自己変革が重要とされ、そうした価値を提供していくためにはその土地に詳しく、道程だけではなく特有の文化などの解説ができるガイドの存在が必要となる。㈱みちのりトラベル東北の相馬氏は「その地域や場所のストーリーや背景などについて、通常のツアーガイドよりも深



MCTの整備イベントの様子
提供：認定NPO法人みちのくトレイルクラブ

い見識があるガイドが詳しく解説しながら案内をすることで旅行の価値がより高まることから、ATにおいてガイドは必須と考える。東北はATに対応できるガイドの数が他エリアに比べて少ないと感じており、ガイドの数と質が課題となっている。行政やNPO法人などが連携して育成の仕組みを構築するなどの取組みが必要ではないか」としている。

② 受け入れ環境の整備

県内で様々なアクティビティや体験の利用者が増加した場合、これまで以上に自然環境の保全や地域の人々の暮らしを守るための工夫が必要となることが想定される。県内は現時点ではオーバーツーリズムの状況は見られないものの、今後さらにインバウンドが増加した場合に自然や地域の暮らしへの影響が顕在化していく可能性がある。

本稿で取り上げたMCTを例に挙げると、MCTはみちのくトレイルクラブが主体となり路体の整備やハイカーへのマナーの啓発などを行っている。具体的には、路体の整備については整備ボランティアの募集のほか、自然観察と整備をセットにしたツアーを企画し、参加者の自然に対する理解を深めてもらいながら整備を実施するなどして1,000キロ以上に及ぶトレイルの保全を図っている。また、倒木を丸太にして階段として利用しているほか、階段の間を小枝や土砂などで埋めるなどといった環境配慮型の整備を行っており、さらに、ガイドラインの作成や地域毎に整備リーダーを育成するなどの仕組みも構築中とのことである。マナーについては、ハイカーが利用するマップブックなどに「みちのく潮風トレイル憲章」（7ページ参照）や「歩くうえで知っておいてほしいこと」などを掲載してMCTの趣旨やマナーを理解してもらうよう努めているほか、Webなどでも発信して啓発を行っている。

おわりに

今後ますますインバウンドの増加が見込まれるなか、ATは国内でさらに関心が高まっていくものとみられ、様々な展開が期待される。また、本県は豊かな自然と地域それぞれが持つ様々な食や文化といった大きな可能性を有しており、ATは地域にある資源とその魅力に改めて着目する機会にもなると考えられる。一方、観光というといかに地域へ来てもらうかという点に目が行きがちであるが、その地域に住む人々にそれぞれの暮らしがあることや誘客することへの責任があることにも留意する必要があるだろう。本県が持つ観光面の多様な可能性を生かしながら、旅行者と地域の人々それぞれが岩手に訪れたい、岩手に来てもらいたいと思える環境が作られていくことを期待したい。（マネジャー 阿部 瑛子）